加山さんの願い

加山さんは散歩が好きだ。仕事を定年退職して、最初は健康のために始めたのだが、実際に歩いてみると見慣れていた風景が新鮮に見える。あちこちとコースを変えて歩いていると、季節の変化が感じられ、また同じ町に住む人々の生活が少しずつ見えてくるようになった。

ある日、加山さんはいつものように散歩しながら、年老いて一人暮らしの佐藤さんの家の前まできて、新聞が三日分も新聞受けにたまっているのに気づいた。（あれ？）と思った加山さんは、

「佐藤さん、佐藤さん、いるの？」と声をかけてみたが、返事はない。やはり留守なのかと思い、何げなく玄関の戸を引くと、ガラガラと開いた。

（留守にしては用心が悪いな。それとも、いるのかな。）

「佐藤さん、佐藤さん」と呼びながら一歩玄関に足を踏み入れ、奥をのぞいたとたん、加山さんは息を飲んだ。佐藤さんが畳の上に、うつ伏せに倒れていたのである。

それからしばらくのことを、加山さんは詳しく思い出せない。ともかく救急車を呼び、警察にも連絡した。心臓発作で倒れた佐藤さんは死後三日たって初めて、加山さんによって発見されたのであった。

（誰だって、いつか死ぬのだけれど、三日間も知られずにいたなんて、つらいな。それにしても、いつも声をかけるようにしていたら、佐藤さんのことも、もっと早くわかったかも知れないのに……。）

加山さんは、誰にも知られずに一人で死んでいった佐藤さんのことを思っては、悔やんだ。

（どうすればいい。私にでも何かできることがあるだろうか。）

加山さんの思いは広がっていった。

そんなとき、市の広報に目が止まった。それは、市内の様々なボランティア・グループの活動紹介と、参加への勧誘の記事であった。加山さんは、その中の「訪問ボランティア」という見出しに興味を引かれた。市内の一人暮らしのお年寄りを訪問し、健康状態などを確認し、話し相手になって、必要なら出来る範囲で身の回りの介護をするというものである。

（これなら私にもできそうだ。それに今の自分の思いに一番ふさわしい。）

加山さんはさっそくボランティア・センターに連絡して、活動を始めた。

（老人の話し相手になるぐらい、簡単なことだ。）

と加山さんは思っていた。だが、最初に訪れた中井さんはけんもほろろに、

「何か売りつける気だ」と言って追い返そうとした。加山さんはさすがにムッとした。

「市のボランティア活動で、訪問に来ました。何かしてあげられることはありませんか。」

「そんなもの、たのんだ覚えはない。いらぬ世話はしないでくれ。」

中井さんはそっけなく背を向けた。後は何をいっても返事はなく、取りつく島もない。どうしてよいのかわからないまま、加山さんはすごすごと帰るしかなかった。

（せっかく訪ねてやっているのに、あの態度は何だ……。一人暮らしの老人はだれもさみしがっているのではないのか。訪ねていけば、うれしいのではないのか。）

加山さんは腹立たしいやら情ないやら、本当に疲れた思いで足が重かった。

（まあ、中井さんは例外だろう。あんな分からずやは、そういるものではない。次の田中さんは違うだろう。）

田中さんは足が不自由で寝ていることが多く、掃除や買い物なども手伝うことになっていた。食料品の買い物などは少し恥ずかしい気もしたが、いかにも世話をしている実感があった。田中さんは「慣れないことで、大変でしょう。すみませんね。」といかにも申し訳なさそうに礼を言ってくれる。加山さんとしても、悪い気はしない。

（よいことをしているんだなあ、ボランティアを始めてよかった。）

中井さんの予想外の反応に落胆した加山さんだが、ボランティア・センターに登録して始めたことでもある。思い通りにならないからといって中井さんへの訪問を簡単にやめるわけにはいかなかった。田中さんへの訪問で元気を取り戻せるのが救いだった。

だが、何回かの訪問を重ねても中井さんとはうまく交流ができなかった。「お元気ですか。何かしてほしいことはありませんか。」と声をかけても、「何もない。」という返事が返ってくるだけだった。それでも、「行かなくては。」という義務感から加山さんは訪問を続けていた。

ある日、近所の後藤さんが声をかけた。

「加山さん、このごろ市のボランティアを始められたとか……。さすが、経済的に余裕のある方は違いますね。うらやましい。私などは、貧乏暇なしですよ。何とか、『ボランティアしてます』って、かっこうよく胸を張って言えるようになりたいものですな。」

後藤さんの言葉は加山さんの心を余計に重くした。加山さんは、

（私は金持ちではありません。暇人でもありません。いらかっこうをしたいのでもありません。）

と言いたかった。だが、言えなかった。中井さんのことを思うと、自信がもてなかった。

凍りつくような冷たい雨の降る日だった。中井さんの家には、もう何回目の訪問だろうか。加山さんは歩きながら、亡くなった父親のことを思い出していた。

「中井さん、今日は。あいにくのお天気ですね。いやなことを思い出しそうですよ。……私の父がなくなったのも、こんな雨の日でした。血圧が高くて心配していたんですけど。脳卒中でした。寒いのはいけません。何年たっても、つらいものです。」

中井さんはキョロッと目を向けた。

「あなたのお父さんも血圧が高かったんか。わしもそうだ。いつお迎えがくるかわからん。」

「中井さん、そんなさみしいことを言わないでくださいよ。それより、血圧はどれくらいですか。私も高めで気になっているんですよ。塩分を控えるようにって医者に言われているんですけど、なかなかそうもいきませんでね。」

「加山さん、それは気をつけなきゃいけませんぞ。油断したらいけません。」

中井さんは真面目な顔で、はっきり言った。加山さんは、思わず笑って答えた。

「そんな人ごとみたいな言い方、おかしいですよ。ご自分の心配のほうが先じゃないですか。」

「なるほど、それもそうだ。一本取られましたな。」

中井さんもつられて笑った。初めて見た笑顔だった。

加山さんは率直に聞いた。

「私をもう嫌ってはいませんか。」

「いや、あんたを嫌ってたわけじゃない。ただ、私は何かしてもらうというのが嫌いなのに、『してあげる』と言われても返事する気にならなかっただけで……。それにしても、加山さんはよく続きますな。私もあんたが来るのが楽しみになりましたよ。」

中井さんの家を出た加山さんは、満たされた気持ちでいっぱいだった。何の身構えもなく、中井さんと話せた。年齢は少し離れてはいるが、友だちを訪ねた思いであった。不思議なことに、疲労感はなかった。からだが暖かくて、軽くなったようだ。冷たい雨は降り続いていたが、寒くなかった。

（また、来よう。この次も、笑顔を見せてもらえたらいいなあ。）

加山さんは、義務感からではなくて、すなおにそう思った。

（それにしても、「何かしてもらうのが嫌いだ」はこたえたな。）その時ふと、田中さんの顔が思い出された。つらそうに「いつもお世話になってすみません」という顔である。加山さんは、思わず立ち止まった。（田中さんはどうしてあれほどつらそうにするのだろうか。もしかしたら……。）

雨の中で傘をもったまま考え続けた。（田中さんは介護の手がないと生きていくのがつらい。だから、田中さんが生きるということは介護されることを含んでいる。世話することも世話されることも、両方が生きていく上で自然な当たり前のことなのだ。それなのに、自分はどのような思いで田中さんに接してきたのか。「世話をしてあげている」ということで、自分だけがいい気分になっていたのではないか。田中さんに、「世話になってすまない」とつらい思いをさせていたのは、自分ではなかったか。）

加山さんは、田中さんに謝まらなければならないと思った。

それからは加山さんは肩の力みが抜けて何をするにも楽になった。自分にできることをしていくことで、だれとでも自然に、人間として出会い支え合い、共に生きていけばいいのだと思うようになった。

きょうも加山さんは、「ちょっと行ってくるよ」と出かける。

（藤永芳純）

出典　道徳教育推進指導資料（指導の手引）4　中学校　読み物資料とその活用　―「主として集団や社会とのかかわりに関すること」―　平成六年三月　文部省